



藪の中 (**yabu no naka**)
Akutagawa, Ryūnosuke

Published: 1922

Categorie(s): Fiction, Mystery & Detective, Non-Fiction, Psychology,
Short Stories

Source: http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/179_15255.html

About Akutagawa:

芥川 龍之介（あくたがわりゅうのすけ、1892年3月1日 - 1927年7月24日）は、日本の小説家。号は澄江堂主人、俳号は我鬼を用いた。その作品の多くは短編で、「芋粥」「藪の中」「地獄」「車」など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの古典から題材をとったものが多い。

「蜘蛛の糸」「杜子春」など、童話も書いた。1927年7月24日未明、友人にあてた遺書に「唯ぼんやりした不安」との理由を残し、服毒自殺。

35歳という年齢であった。後に、芥川の業績を記念して菊池寛が芥川龍之介賞を設けた。戒名は懿文院龍之介日崇居士。Ryūnosuke Akutagawa (芥川 龍之介, Akutagawa Ryūnosuke) (March 1, 1892 - July 24, 1927) was a Japanese writer active in Taishō period Japan. He is regarded as the "Father of the Japanese short story", and is noted for his superb style and finely detailed stories that explore the darker side of human nature. (source: Wikipedia, English/日本語)

Also available on Feedbooks for Akutagawa:

- 羅生門 (*rashoumon*) (1915)
- 鼻 (*hana*) (1916)

Copyright: This work is available for countries where copyright is Life+70 and in the USA.

Note: This book is brought to you by Feedbooks

<http://www.feedbooks.com>

Strictly for personal use, do not use this file for commercial purposes.

?非違使（けびいし）に問われたる木樵（きこ）りの物語

さようでございます。あの死骸（しがい）を見つけたのは、わたしに
違いございません。わたしは今朝（けさ）いつもの通り、裏山の杉を伐
（き）りに参りました。すると山陰（やまかげ）の藪（やぶ）の中に、
あの死骸があったのでございます。あった?でございますか? それは
山科（やましな）の?路からは、四五町ほど隔たって居りましょう。竹
の中に?（や）せ杉の交（まじ）った、人?（ひとけ）のない所でござい
ます。

死骸は縹（はなだ）の水干（すいかん）に、都風（みやこふう）のさ
び烏帽子をかぶったまま、仰向（あおむ）けに倒れて居りました。何し
ろ一刀（ひとかたな）とは申すものの、胸もとの突き傷でございませ
うから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳（すほう）に滲（し）みたよう
でございませう。いえ、血はもう流れては居りませう。傷口も乾（かわ）
いて居ったようでございませう。おまけにそこには、馬蠅（うまばえ）が
一匹、わたしの足音も聞えないように、べったり食いついて居りました
け。

太刀（たち）か何かは見えなかったか? いえ、何もございませ
う。ただその側の杉の根がたに、?（なわ）が一筋落ちて居りました。それ
から、——そうそう、?のほかにも櫛（くし）が 一つございませ
う。死骸のまわりにあったものは、この二つぎりでございませ
う。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、き
っとあの男は殺される前に、よほど手痛い?きでも致したのに違
いございませう。何、馬はいなかったか? あそこは一体馬なぞ
には、はいれない所でございませう。何しろ馬の通（かよ）う路
とは、藪一つ隔たって居りますから。

?非違使に問われたる旅法師（たびほうし）の物語

あの死骸の男には、確かに昨日（きのう）遇（あ）って居ります。昨日の、——さあ、午頃（ひるごろ）でございましょう。場所は?山（せきやま）から山科（やましな）へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に?った女と一しよに、?山の方へ?いて参りました。女は牟子（むし）を垂れて居りましたから、?はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩重（はぎがさ）ねらしい、衣（きぬ）の色ばかりでございます。馬は月毛（つきげ）の、——確か法師?（ほうしがみ）の馬のようでございました。丈（たけ）でございますか? 丈は四寸（よき）もございましたか? ——何しろ沙門（しゃもん）の事でございますから、その?ははっきり存じません。男は、——いえ、太刀（たち）も?びて居（お）れば、弓矢も携（たずさ）えて居りました。殊に?い塗（ぬ）り籠（えびら）へ、二十あまり征矢（そや）をさしたのは、ただ今でもはっきり?えて居ります。

あの男がかようになろうとは、夢にも思わずに居りましたが、真（まこと）に人間の命なぞは、如露亦如電（によろやくによでん）に違いございませぬ。やれやれ、何とも申しようのない、?の毒な事を致しました。

?非違使に問われたる放免（ほうめん）の物語

わたしが搦（から）め取った男でございますか？　これは確かに多襄丸（たじょうまる）と云う、名高い盗人（ぬすびと）でございます。もっともわたしが搦（から）め取った時には、馬から落ちたのでございましょう、栗田口（あわだぐち）の石橋（いしばし）の上に、うんうん呻（うな）って居りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜（さくや）の初更（しよこう）頃でございます。いつぞやわたしが捉（とら）え損じた時にも、やはりこの紺（こん）の水干（すいかん）に、打出（うちだ）しの太刀（たち）を佩（は）いて居りました。ただ今はそのほかにも御?の通り、弓矢の類さえ携（たずさ）えて居ります。さようでございますか？　あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを?いたのは、この多襄丸に違いございませぬ。革（かわ）を?いた弓、?塗りの箆（えびら）、鷹（たか）の羽の征矢（そや）が十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおっしゃる通り、法師?（ほうしがみ）の月毛（つきげ）でございます。その畜生（ちくしょう）に落とされるとは、何かの因?（いんねん）に違いございませぬ。それは石橋の少し先に、長い端綱（はづな）を引いたまま、路ばたの青芒（あおすすき）を食って居りました。

この多襄丸（たじょうまる）と云うやつは、洛中（らくちゆう）に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。去年の秋鳥部寺（とりべでら）の賓頭盧（びんずる）の後（うしろ）の山に、物詣（ものもう）でに来たらしい女房が一人、女（め）の童（わらわ）と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業（しわざ）だとか申して居りました。その月毛に?っていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりませぬ。差出（さしで）がましゅうでございますが、それも御詮議（ごせんぎ）下さいまし。

?非違使に問われたる媪（おうな）の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附（かたづ）いた男でございます。が、都のものではございません。若狭（わかさ）の国府（こくふ）の侍でございます。名は金?（かなざわ）の武弘、年は二十六?でございます。いえ、優しい?立（きだて）でございますから、遺恨（いこん）なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか? 娘の名は真砂（まさご）、年は十九?でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝?の女でございますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持った事はございません。?は色の浅?い、左の眼尻（めじり）に?子（ほくろ）のある、小さい瓜??（うりぎねがお）でございます。

武弘は昨日（きのう）娘と一しよに、若狭へ立ったのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうなりましたやら、?（むこ）の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥（うば）が一生のお願いでございましてから、たとい草木（くさき）を分けましても、娘の行方（ゆくえ）をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸（たじょうまる）とか何とか申す、盗人（ぬすびと）のやつでございます。?ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

多襄丸（たじょうまる）の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問（ごうもん）にかけられても、知らない事は申されません。その上わたしもこうなれば、卑怯（ひきょう）な？し立てはしないつもりです。

わたしは昨日（きのう）の午（ひる）少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子（ひょうし）に、牟子（むし）の垂絹（たれぎぬ）が上ったものですから、ちらりと女の？が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなったのですが、一つにはそのためもあったのでしょう、わたしにはあの女の？が、女菩薩（によぼさつ）のように見えたのです。わたしはその咄嗟（とっさ）の間（あいだ）に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪（うば）うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀（たち）を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ？力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派（りっぱ）に生きています、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が？いか、わたしが？いか、どちらが？いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない？です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科（やましな）の？路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫（くふう）をしました。

これも造作（ぞうさ）はありません。わたしはあの夫婦と途（みち）づれになると、向うの山には古塚（ふるづか）がある、この古塚を？（あば）いて見たら、鏡や太刀（たち）が？山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪（やぶ）の中へ、そう云う物を埋（うず）めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い？に？り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時（はんとき）もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路（やまみち）へ馬を向けていたのです。

わたしは藪（やぶ）の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に？（かわ）いていますから、異存（いぞ

ん)のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありますまい。わたしはこれも?を云えば、思ふ壺(つぼ)にはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間(あいだ)は竹ばかりです。が、半町(はんちよう)ほど行った?に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合(つごう)の好(い)い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もっともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう?(や)せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が?(まば)らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩(は)いているだけに、力は相当にあったようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括(くく)りつけられてしまいました。?(なわ)ですか? ?は盗人(ぬすびと)の有難さに、いつ?を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を?張(ほおば)らせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも?星(ずぼし)に当たったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠(いちめがさ)を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいって来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛(しば)られている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに?(ふところ)から出していたか、きらりと小刀(さすが)を引き?きました。わたしはまだ今までに、あのくらい?性の烈(はげ)しい女は、一人も見ただ事はありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹(ひばら)を突かれたでしょう。いや、それは身を?(かわ)したところが、無二無三(むにむざん)に斬り立てられる内には、どんな怪我(けが)も仕兼ねなかったのです。が、わたしも多襄丸(たじようまる)ですから、どうにかこうにか太刀も?かずに、とうとう小刀(さすが)を打ち落しました。いくら?の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかったのです。所が泣き伏した女を後(あと)に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、?違いのように縋(すが)りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が

死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥（はじ）を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——それも喘（あえ）ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい?になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きっとわたしはあなた方より残酷（ざんこく）な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の?を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳（ひとみ）を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴（かみなり）に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭（ねんとう）にあったのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑（いや）しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒（けたお）しても、きっと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀（たち）に、血を塗る事にはならなかったのです。が、薄暗い藪の中に、じっと女の?を見た刹那（せつな）、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと?悟りました。

しかし男を殺すにしても、卑怯（ひきょう）な殺し方はしたくありません。わたしは男の?を解いた上、太刀打ちをしろと云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた?なのです。）男は血相（けっそう）を?えたまま、太い太刀を引き?きました。と思うと口も利（き）かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目（ごうめ）に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡（あと）も残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉（のど）に、断末魔（だんまつま）の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いのか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路（やまみち）へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食べています。その後（ご）の事は申し上げるだけ、無用の口数（くちかず）に過ぎますまい。ただ、都（みやこ）へはいる前に、太

刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗（おうち）の梢（こずえ）に、懸ける首と思っていますから、どうか極刑（ごっけい）に遇わせて下さい。（昂然（こうぜん）たる態度）

清水寺に来れる女の懺悔（ざんげ）

——その紺（こん）の水干（すいかん）を着た男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲（あざけ）るように笑いしました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶（みもだ）えをしても、体中（からだじゅう）にかかった？目（なわめ）は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、？（ころ）ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟（とっさ）の間（あいだ）に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端（とたん）です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿っているのを？（さと）りました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震（みぶる）いが出ずにはいられません。口さえ一言（いちごん）も利（き）けない夫は、その刹那（せつな）の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃（ひらめ）いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑（さげす）んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう？を失ってしまいました。

その内にやっと？がついて見ると、あの紺（こん）の水干（すいかん）の男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛（しば）られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の？を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと？りません。やはり冷たい蔑（さげす）みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中（うち）は、何と云えば好（よ）いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りしました。

「あなた。もうこうなった上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ？悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥（はじ）を御？になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す？には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌（いま）わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂（き）けそうな胸を抑えながら、夫の太刀（たち）を探しました。が、あの盗人（ぬすびと）に奪われたのでしょう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀（さすが）だけは、わたしの足もとに落ちているのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇（くちびる）を動かしました。勿論口には?の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を?りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言（ひとこと）云ったのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹（はなだ）の水干の胸へ、ずぶりと小刀（さすが）を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、?を失ってしまったのでしょうか。やっとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が?えていました。その蒼ざめた?の上には、竹に交（まじ）った杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を?みながら、死骸（しがい）の?を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなったか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀（さすが）を喉（のど）に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢（じまん）にはなりません。 （寂しき微笑）わたしのようには腑甲斐（ふがい）ないものは、大慈大悲の?世音菩薩（かんぜおんぼさつ）も、お見放しなすったものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人（ぬすびと）の手ごめに遇ったわたしは、一体どうすれば好（よ）いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——（突然烈しき獻敬（すすりなき））

巫女（みこ）の口を借りたる死?の物語

——盗人（ぬすびと）は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利（き）けない。体も杉の根に縛（しば）られている。が、おれはその間（あいだ）に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真（ま）に受けるな、何を云っても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然（しょうぜん）と?の落葉に坐ったなり、じっと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは?（ねたま）しさに身悶（みもだ）えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を?したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる?はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も?いたのだ、——盗人はとうとう大胆（だいたん）にも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうっとり?を?（もた）げた。おれはまだあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有（ちゅうう）に迷っていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔恚（しんい）に燃えなかったためしはない。妻は確かにこう云った、——「ではどこへでもつれて行って下さい。」（長き沈?）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇（やみ）の中に、いまほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち?色（がんしよく）を失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの方が生きていては、あなたと一しよにはいられません。」——妻は?が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆?（さかさま）におれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい?（のろ）わしい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこのくらい、——（突然迸（ほとぼし）るごとき嘲笑（ちようしょう））その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋（すが）っている。盗人はじっと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒（けたお）された、（再（ふたた）び迸るごとき嘲笑）盗人は静かに?腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それ

とも助けてやるか？ 返事はただ領（うなず）けば好（よ）い。殺すか？」——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦（ゆる）してやりたい。（再び、長き沈？）

妻はおれがためらう内に、何か一声（ひとこえ）叫ぶが早いか、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟（とっさ）に飛びかかったが、これは袖（そで）さえ捉（とら）えなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後（のち）、太刀（たち）や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの？（なわ）を切った。「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を？（さ）してしまふ時に、こう？（つぶや）いたのを？（さ）えている。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは？（さ）を解きながら、じっと耳を澄ませて見た。が、その声も？（さ）がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？（三度（みたび）、長き沈？）

おれはやっと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀（さすが）が一つ光っている。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺（さ）した。何か腥（なまぐさ）い塊（かたまり）がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰（やまかげ）の藪の空には、小鳥一羽囀（さえず）りに来ない。ただ杉や竹の杪（うら）に、寂しい日影が漂（ただよ）っている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇（うすやみ）が立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そっと胸の小刀（さすが）を？（さ）いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢（あふ）れて来る。おれはそれぎり永久に、中有（ちゅうう）の闇へ沈んでしまった。……………

大正十年十二月

Metadata

底本(original text): 「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

- 1987 (昭和62) 年1月27日第1刷?行
- 1996 (平成8) 年7月15日第8刷?行

底本の親本(original text source): 「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

- 1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月
- ※底本の中見出しは、ゴシック体で組まれています。

入力(entry): 平山誠、野口英司

校正(proofreading): もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開 (open to public)

2004年3月9日修正 (amendment)

Loved this book ?
Similar users also downloaded

Ryūnosuke Akutagawa

鼻 (*hana*)

Zenchi Naigu is a Buddhist priest during Japan's Heian period. He is ascribed the "wisdom of zen", but is more concerned with diminishing his ungainly, large, and dangling nose. The story is mainly a commentary on vanity and religion, in a style and theme typical to Akutagawa's work.

「鼻」(はな)は芥川龍之介による初期の短編小?。1916年に『新思潮』の創刊号で?表された。『今昔物語』の「池尾禅珍内供鼻語」および『宇治拾遺物語』の「鼻長き僧の事」を題材としている。「人の幸福をねたみ、不幸を笑う」と言う人間の心理を捕らえた作品。この小?で夏目漱石から??された。

(from Wikipedia)

Note: You may need to embed a Japanese unicode font into this file in order to view it on your reader.

Ryūnosuke Akutagawa

羅生門 (*rashoumon*)

"Rashōmon" (Japanese: 羅生門) is a short story by Akutagawa Ryūnosuke based on tales from the *Konjaku Monogatari* shū. A man considering whether or not to become a thief meets a woman stealing hair from corpses. Their conversation explores the morality of theft.

The story was first published in 1915 in *Teikoku Bungaku*. Despite its name, it provided no direct plot material for the Akira Kurosawa movie *Rashōmon*, which was based on Akutagawa's 1921 short story, *In a Grove*.

『羅生門』(らしょうもん)は、芥川龍之介による初期の小?。『今昔物語集』の「羅城門登上層見死人盗人語第十八」を題材にした短編小?。羅生門とは、朱雀大路にある平安京の正門のことである。正しくは羅城門であるが、人間の生を意識してあえて「羅生門」にしたと考えられている。高校教科書などでも採用され、?く知名度がある。

(source: Wikipedia)

Note: You may have to embed your own Japanese unicode font in order for this to display on your reader.

An English version is available on Feedbooks at: <http://www.feedbooks.com/book/4254>



www.feedbooks.com
Food for the mind